

ユニバーシティーミュージアムへの 熱き期待とハーバリウムの意義

植田邦彦

資料館だより8号に清水建美先生にインタビューした内容として「標本室を訪ねて金沢大学理学部ハーバリウム」とある。理学部生物学教室植物自然史研究室が管理、運営しているハーバリウムの具体的な内容などについてはそちらを参照していただくとして、今回は日本の標本庫（室）の現状と問題点について触れてみたい。

生物学においては、何をまずしておいても、論議に関わる人すべてが正しく対象の生物を認識できなければならない。ある生物を一つの名前で代表させ、その名前と生物との間に厳密に1対1対応がついてなければならないわけである。ある人がイネという用語を使ってイネについて議論しているのに、相手がイネという用語からコムギを思い浮かべていたのでは、話しにならないからである。このために学名というものが存在する。学名がモノと1対1対応するための根源はタイプ標本である。このタイプ標本の保管がハーバリウムの最も重要な役割である。タイプ標本は永久に良好に保管されなければならない。

ハーバリウムの実際的な存在意義は重要なものだけで他にもいくつかある。1) すべての個体がまったく同一という分類群は存在しない。必ず変異する。そのためには野外での観察や遺伝的な調査も無論必要であるが、標本を蓄積することでその変異を捉えることが出来る。ハーバリウムは、それをいつでもその場で調査できる点で重要である。現地調査が常に可能というわけではないからである。2) 植物界を正しく広く認識するためにはまずは標本を収集してどのような植物があるのかを知らなければいけない。見たいときに見える標本のありがたみは言葉ではいいつくせない。また、あるグループを研究するときにはその全体像の把握のための標本調査を行うことが肝要である。3) ある植物の研究を行って成果を発表するときに、その対象の名前を正しく同定できたかどうかがあやふやな場合もある。発表当時には正しくともその後種の認識が変更されたら、名前からだけでは研究対象が何であったのかわからなくなる。このような時のために研究対象を証拠標本として保存しておくことが重要である。4) 植物の分布や変異を調べようと思っても、現在のように人間による開発などが急激であれば手遅れのものも多い。標本がきちんと保存されていれば、ある程度補うことが出来る。

このように、標本庫は「死んでしまった押し葉」の墓場では決してない。くめどつきせぬ研究対象の保管整理場所であり、まさに研究の現場なのである。

ところが日本の標本庫（室）は世界的に見ればあまりにもとんでもない状況に置かれている。いわゆる開発途上国のそれよりもはるかにひどいのである。原因は明らかで、1小講座単位（学科制なら1教官）で管理することしか出来ないからである。

標本庫の管理は生半可なものではない。標本を野外

で採集してきたら、丁寧に乾燥し、食害昆虫を殺し、台紙に正しく張り付け、ラベルに必要十分な情報を書き込んで貼りつけ、そしてそれを正しく同定して入れるべき戸棚に収納しなければならない（一度間違った所に入れるとまず出てこなくなる）。標本庫には虫が入らぬよう、常に乾燥しているよう、常に気をつけていなければならない。膨大な時間がこのような「作業」にとられてしまう。しかも相当程度の経験が必要であるので、ずぶの素人にまかせることは出来ない。このような仕事を毎日やっているのは、高い研究レベルの仕事は、例え標本だけを使用する古典分類学の仕事ですら、不可能である。ましてや多様な技術を駆使した研究が日常的になった現在ではとてもそのような実験などを行う時間はとれない。実験などを真面目に行えば、標本庫の発展どころか、維持管理すら出来ない。海外であれば、採集専門員、標本作成者、標本貼付者、標本のソーティング専門者は常勤のテクニシャンである。また、国際的慣例として標本交換というシステムがある。交換のために標本を整理して送るにしても、教官自らが小包を作り、発送し、そして郵送料は講座負担である。

ところが日本ではテクニシャンを雇うとすればアルバイトを講座で雇うしかない。こうして、アメリカのような近代主義の国ですら50万点以上を有する標本庫が数え切れないほどあるのに比べ、日本には4、5箇所しかない。国立大学では第3位の標本数を誇る我が金沢大学でもようやく25万点であり、世界的に見れば、評価の対象にもならない小規模である。

この悩みは国内のどのハーバリウムでも、もはやどうしようもないところまできている。つまり、倉庫にせざるを得ないのである。ハーバリウム用の面積を取れないところでは国有財産目録からはずされた崩壊寸前の旧校舎に保管し、雨漏りと戦うなどと言う考えられないような劣悪な状況にあるところもある。日本植物分類学会でもハーバリウム問題検討委員会を設けて学界として検討しているが、具体的成果はあがっていない。今の大学のシステムの中では解決がつかないのである。

今、ただ一つ、我々が期待をかけているのがユニバーシティーミュージアム構想である。博物館とは物置では断じてない。常に保管物に基づく研究が行われ、収集物を整理し、発展させ、どのような研究にも対応できるようにしておくのが最低限の機能である。大学では教育目的も重要な任務である。管理する方策と人的資源が考慮されない限り、日本のハーバリウムは枯れ草のごみ箱に成り下がる日も遠くはない。唯一の解決策は大学における教育研究の場としてのユニバーシティーミュージアムにハーバリウムを所属させ、人員配置をすることである。金沢大学に一刻も早くユニバーシティーミュージアムが整備されることを心から願う次第である。（理学部 自然史）